＊湘南遺産プロジェクトHP＊

湘南の由来
ショートショート
第４話

“湘南”という地域呼称はどこから来たのか？ その疑問に迫るショートショートの第4話

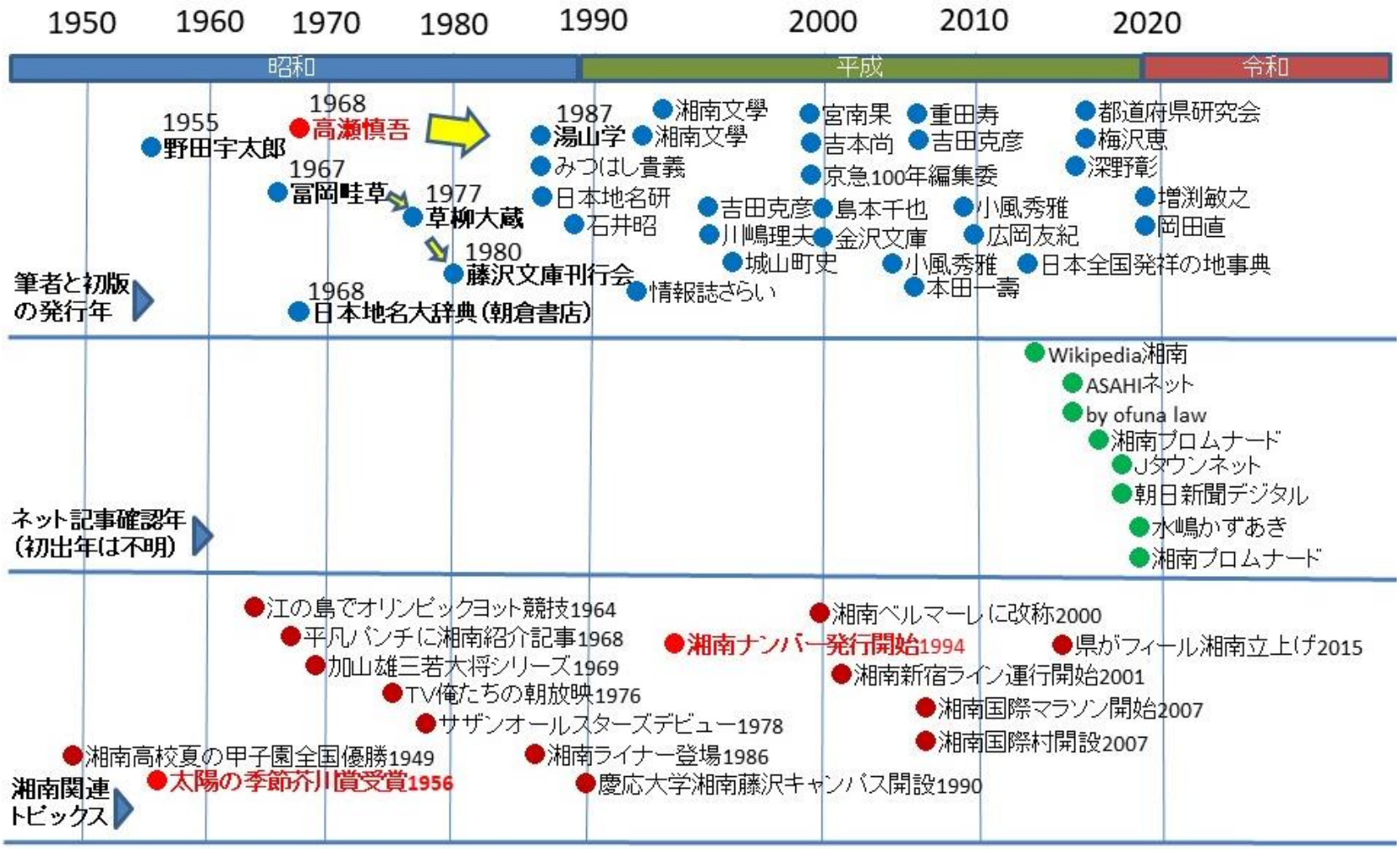
えと文　和田精二　2021,02,20

4-1 最初に“湘南の由来”を唱えたのは誰か？

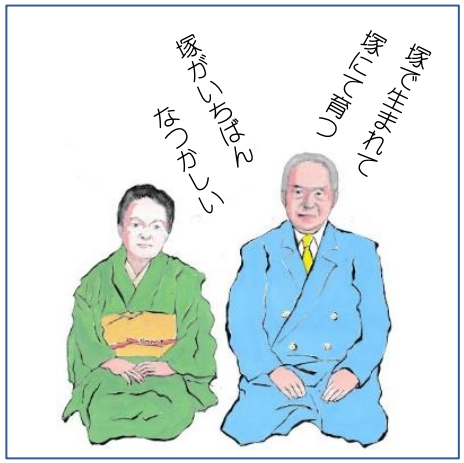
“湘南の由来”の発生源を語るのは難しいことではない。
むしろ“湘南”という地域呼称が定着していく過程を語る方が難しい。
今回は趣向を変えて“湘南の由来”説を誰が最初に唱えたのか、
その説がどの様なものだったのか？にこだわってみたい。

湘南エリアの図書館で調べた結果をもとに
No126 の年表“いつ誰が湘南の由来について
書いたのか？”をつくってみた。

取りこぼしている文献も多いと思うが、
おおよその傾向は把握できそうである。



いつ誰が“湘南の由来”について書いたのか？



高瀬慎吾と彼を支えた妻のカツ
高瀬の米寿祝記念誌掲載句を引用

この表から見えて来る結論を書いてしまう。

“湘南の由来”説は、平塚市の郷土史家“高瀬慎吾”（1900～1991）の説を以って嚆矢としてよい。

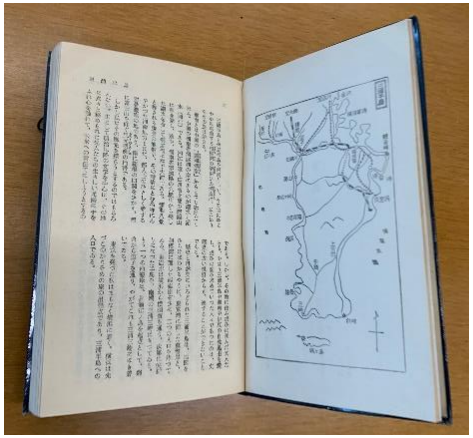
現在、書籍やネット等で展開されているすべての“湘南の由来”説は高瀬の説の引用またはその引用である。

湘南紀行文学会同人発行のガイドブック“湘南の文学めぐり”

高瀬の“湘南の由来”説が掲載されたのは1968（S43）年発行の“湘南の文学めぐり”の序章である。

“湘南の文学めぐり”は湘南の学校図書館関係者がまとめ上げた文学散歩用のガイドブック。1968(S48)
巻頭の4頁にわたり 高瀬の“湘南について”が掲載されている。

高瀬によって書かれた説が“湘南の由来”説として広く使用され定着したと考えてよいようである。



“湘南伊豆文学散歩”は野田宇太郎の文学散歩シリーズの1冊

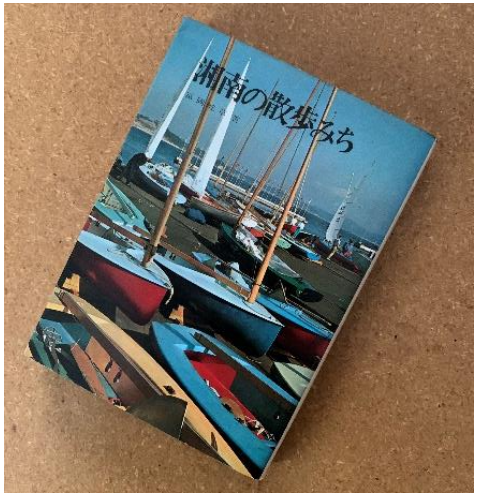
高瀬以前に“湘南の由来”について書いた人物について触れておく。

ひとりは“文学散歩シリーズ”で人気を博した詩人/文芸評論家の“野田宇太郎”。

野田は“湘南伊豆文学散歩”において“湘南とは中国の瀟湘湖南からとった称呼だと云ふ“ と由来に触れている。1955（S30）

古来 漢学者や文人により伝えられた説の繰り返しに過ぎないが、ここでは文献に現れたということで意味がある。

129



山渓文庫“湘南の散歩道”

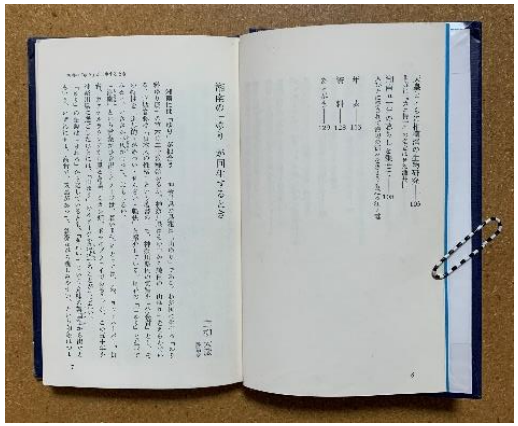
もうひとり“湘南の由来”に触れたのが写真家の“富岡畦草”。

富岡が書いたのは山渓文庫“湘南の散歩道” 冒頭の4行。

“日清戦争後中国に旅した明治の文化人は湖南省洞庭湖とこれに注ぐ「湘河」の美に打たれて帰国すると、彼らが好んだ相模南部の風景に「湘南」の名を冠した“。1967（S42）

富岡は“湘南” 呼称を相模湾沿岸に広めたのは明治の文化人であると断定している。

130



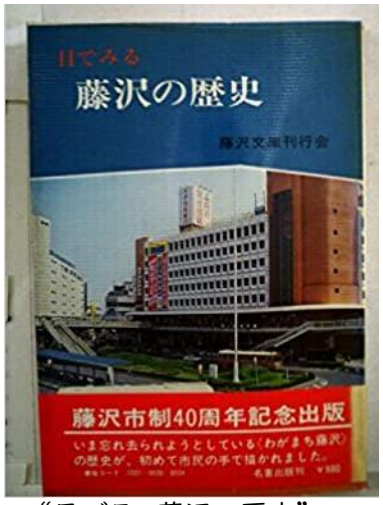
“湘南の50年”は湘南における各分野の先人を紹介する湘南の昭和史

富岡の説はその後も引用される。

最初の引用は 評論家/作家/ジャーナリストとして著名だった“草柳大蔵”

草柳は“湘南の50年”の中で、湘南とは瀟湘湖南の略称であることは当然であると前置きした上で、具体的に名づけたのは近世の漢学者などの文人趣味であると推定する。
そこで富岡 の“明治の文化人”説を持ち出すが、“富岡もやはり明治の文化人にとどまっている”と述べ、結論を出していない。1977（S52）

131



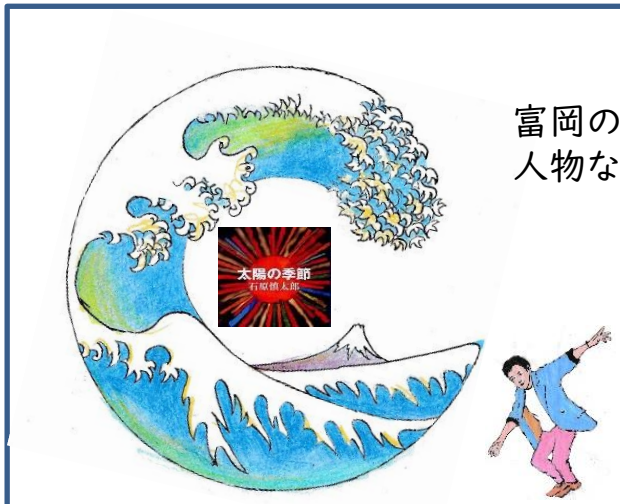
“目で見る藤沢の歴史”

富岡の“明治の文化人”説はさらに一人歩きする。

藤沢文庫刊行会が1980（S55）年に出版した“目で見る藤沢の歴史”には、

“湘南とは相模の南部を意味する「相南」だとか、日清戦争後に中国を旅した明治の文化人が、湖南省洞庭湖とこれに注ぐ湘河の美しさに魅せられ帰国すると、ここ相模南部の景勝の地に湘南の名をつけたのだとかいわれている” と、富岡説を紹介している。

132



“太陽の季節”が湘南の印象を変えてしまう

富岡のいう“明治の文化人”が誰なのか分からないが、“湘南の由来”を説く人物など珍しい時代だったからこそ富岡の綴った4行が珍重されたことになる。

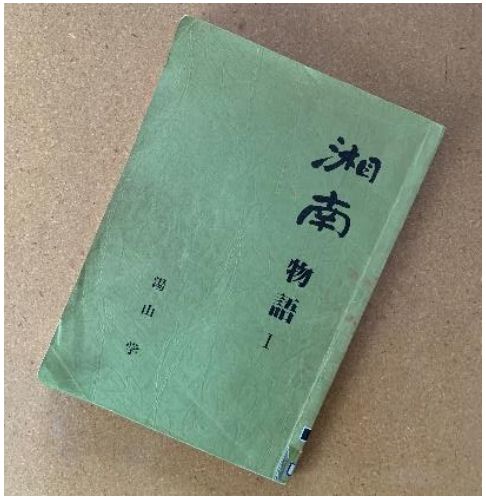
徳富蘆花のベストセラー“自然と人生”をもってしても湘南の知名度は低く、湘南に対する世間の関心も低かったのである。

こうした状況を変えたのが“太陽の季節”。1956(S31)
風光明媚さに依存していた“湘南”の印象を一挙に変えてしまう。

逗子在住の大学生石原慎太郎の“太陽の季節”芥川賞受賞によりローカルだった“湘南”が全国に知られ、“若者の湘南”イメージが浸透していく。

湘南の知名度が上がると、1987(S62)年以降、書籍や雑誌に“湘南の由来”の記述が次々と登場する。No.126の表

その後、“湘南ナンバー”発行騒動などに後押しされ、“湘南の由来”説はネット記事も含めて増加し定着していく。



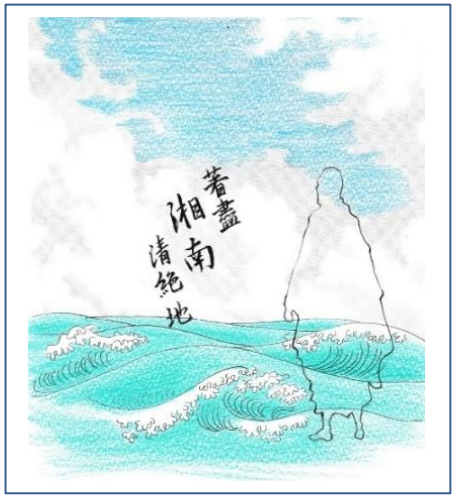
湯山学の“湘南物語Ⅰ”（私家版）

前述したように“湘南の由来”説はすべて高瀬の説に発している。

最初に高瀬説が引用されたのは相模国の歴史学の大家“湯山 学”が上梓した私家版“湘南物語Ⅰ”の冒頭。

第1章“湘南とは”の最初の項目に高瀬の“湘南の由来”説が登場する。

湯山は次の様に述べて 説明を高瀬に託す。

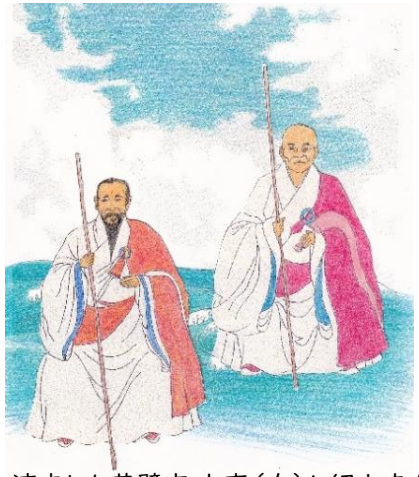


崇雪は鴫立沢の標石に“湘南”を刻む

“ 湘南といわれる理由から始めたいが、幸い郷土史家の高瀬慎吾氏が湘南についてという題名でまとめているので紹介しよう（原文を要約）”

湯山が高瀬の説を全面的に引用しているのは、高瀬説に全幅の信頼を寄せているためである。

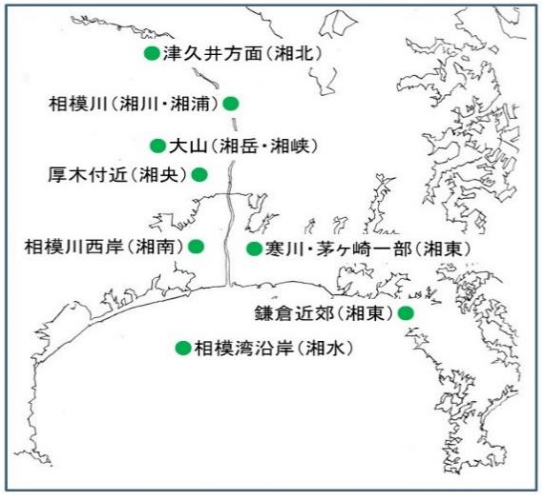
こうして湯山のお墨付きを得た高瀬の“湘南の由来”説は査読を通った学会論文のごとき確証を得て拡散していく。



渡来した黄檗宗 木庵（左）と紹太寺を
開創した日本の禅僧 鉄牛（右）

高瀬が展開した“湘南の由来”説の概要を列挙しておく。

■序文
・湘は相の転化というより雅称が適当
・相模国8郡の名称
■相模の由来と変化
・古事記の日本武尊東征の記事に表れる相模呼称
・その後のサガミ呼称の変化
■江戸時代の事例-1
・相模湾を湘江に例えた木庵（紹太寺）の詩文と瀟湘八景



“湘”を冠した地域呼称が相模川中心に展開

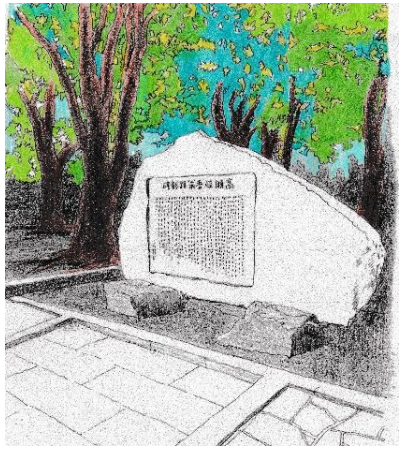
■瀟湘八景の由来
・湖南、湘水、洞庭湖と瀟湘八景、衡山と湘南呼称
■碧巌録(へきがんろく)における湘南問答
・僧耽源（たんげん）と唐皇帝による湘南問答
■江戸時代の事例-2
・相模川を湘川に例えた鉄牛（龍峰寺）の詩文
■相模国の詩文に表れる“湘”の文字
・湘東、湘水、湘岳、湘峡、湘東

“鴫立沢”標石の表面（左）と裏面（右）

■鴫立沢と湘南
・古石標と崇雪の標石の刻銘“湘南”
・五智如来像の台座文字が示す崇雪の存在
・湘南地方最古の証左としての“湘南”

“湘南”呼称の発生地とそれが定着していく経緯について基本的な項目が簡潔に説明されている。

“湘南の由来”についての高瀬の英知は湘南エリアに留まらず中国の古文書にまで及んでおり、その博学多識には驚くしかない。



平塚図書館の前方に立つ
“高瀬慎吾翁顕彰碑”

博物館等が建ち並ぶ平塚市文化センターの一角、平塚市図書館の前方に高瀬慎吾の顕彰碑がある。

この顕彰碑は、1979（S54）年に平塚市の文化発展に寄与した功労に対し授与された勲五等瑞宝章を記念している。

平塚市の史蹟/遺跡の発掘等文化財の保護に心血注いだ高瀬の功労が加藤元市長題額、石川市長撰文で銘記されている。

八幡山の洋館は奇跡的に空襲の被害を免れた市内唯一の明治の洋風建築

ここで高瀬慎吾の履歴を見てみよう。

戦前は、家業の印刷業のかたわら、平塚市の文化事業支援団体“平塚文明協会”に注力したり、図書館建設を訴えて市会議員として活動する

1900(M33) 平塚町大字平塚新宿に生まれる
1925(T14) 家業の印刷業を継ぐ（平塚空襲で店舗焼失し廃業）
1929(S 04) アランド会（後の“平塚文明協会”）を立上げる
1940(S 15) 平塚市会議員として図書館実現に取組む
1941(S 16) 戦争のため愛甲郡荻野村（現厚木市上荻野）に疎開、村長、村議会議長等を務める

平塚八幡宮は毎年5月5日開催の国府祭に参加する相模5社の１社

戦後は疎開先から戻り、平塚の郷土史研究と文化財収集に注力するが、特に平塚市史編纂事業と文化財保護活動では平塚市に大きな足跡を残す。

1951(S 26) 平塚市に戻る。市の要請で市史編纂事業に取組む一方、文化財保護委員、図書館協議会委員、観光協会理事長等を務める
1979 (S54) 勲五等瑞宝章を授与される（平塚市の文化向上発展に寄与）
1981 (S56) 収集した文化財8,000点を平塚市に寄贈（高瀬コレクション）
1991 (H03) 享年91歳にて逝去

合併記念祝賀パレードで
象に乗る戸川市長

高瀬の活動は戦前からの団体活動を通じた人脈と密接に結びついている。

1929(S4)年、高瀬がリーダーとなり立ち上げた親睦団体“アランド会”は、空襲で焦土と化した平塚 の再生を目指し“平塚文明協会”に発展する。

政治に目覚めた“平塚文明協会”は3名の市長（柿澤.戸川,加藤）を輩出するが、そのうち、高瀬との関係で特筆されるのが“戸川貞雄”。

戸川は当時は珍しかった“文人市長”として名を馳せる。

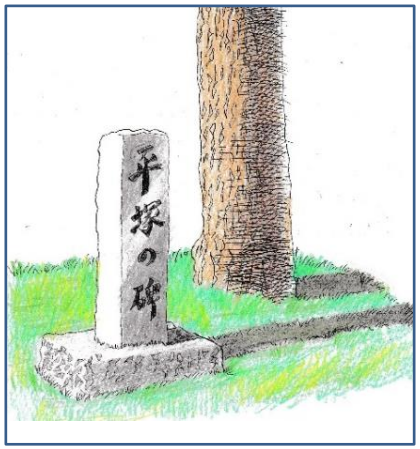
河野謙三に請われて出馬を決意

早大文学部卒業後、編集者を経て作家稼業中の戸川は、参議院議員 河野謙三の要請で市長選に出馬する。

江戸川乱歩から林家正蔵、杉葉子まで賑やかな応援を得て僅差で当選、任期中は、お祭り好きの文人市長として話題を集める。

競輪廃止を公約に当選したが競輪悪妻論を以って競輪存続に転向した他、湘南平の命名、七夕祭りの規模拡大等で注目を集める。

ここでは、戸川と高瀬のコンビによる文化財保護の活動に注目してみる。



平塚の塚緑地内にある“平塚の碑”

戸川は“歴史検証に基づく文化財保護”を施政方針のひとつとする。

そこには1919（T8）年に“平塚の碑”を建碑した船津愛之助平塚町長の行動がヒントとなっている。

船津は市内に史跡を残す碑が無いことを憂い“平塚の碑”を建立したが、戸川には船津の意思を凌駕できる勝算があった。

このときの観光協会理事長は“平塚文明協会”以来の盟友高瀬。“歴史検証に基づく文化財保護”を推進するには絶妙過ぎるコンビが出来上がっていたのである。

高山樗牛の石碑は杏雲堂病院の跡地内に建碑されている

このコンビの最大の事業は“高山樗牛”碑の建立である。

明治の思想家“高山樗牛”終焉の地が杏雲堂病院と判明したのは高瀬の検証の賜物であると“湘南の文学めぐり”に記している。戸川の喜びが表れている。

また、“わが市の誇る異色の郷土史家”と高瀬を称賛しているのも（市長の椅子/講談社）文化財保護に対する高瀬の支援の絶大さを物語っている。

高山樗牛

同様に、高瀬も戸川の行政手腕に助けられ、“歴史検証に基づく文化財保護”で成果をあげていく。No.156【参考21】

ふたりは公費に頼らず、私費の不足分を寄付で補いながら50余の史蹟の石碑や顕彰碑、30の標柱/説明版を設置する。

高山樗牛の他に、村井弦斎、北原白秋、河井酔茗、岡野金次郎等の石碑が建立され、石碑の多い町平塚を創出する。

“食道楽”を書いた明治のベストセラー作家“村井弦斎”の石碑は“村井弦斎まつり”へ発展し、町づくりに寄与することになる。

村井弦斎

高瀬の最大の目標は平塚の歴史の徹底した検証と記録にある。

そのため 日本書紀や風土記や延喜式等の古文献をはじめ、更科や十六夜等の日記ものから東鑑新編相模風土記等に至るまで、平塚に関連した文献を調べまくる。

その結果を“平塚小誌”,“平塚市風土記抄”,“須賀の今昔”等に上梓。
生涯の著作は50余冊に及び、平塚市史の根幹を支えることになる。

戸川が発起人となり建碑した“丁髷（ちょんまげ）塚”は茅ヶ崎海岸で毎年開催される浜降祭の起源のひとつを示す塚である

一方で高瀬は文化財の収集に異常なまでのエネルギーを費やしている。

円墳が崩され土器が出土した時や、旧家の土蔵から古書や古資料が出るとすぐに現場へ飛んでいき大量に購入した。

こうして集めた文化財や史料 8,000点 は市に寄贈され（平塚市博物館）、自宅の資料は“高瀬郷土文庫”として保管されている。

図書館建設を目指した高瀬は市会議員となり建設目指して奔走する

地域の歴史は過去の人文知の宝庫であり、それを次代に伝える使命があると自認し実践した高瀬は平塚市の至宝といえる。

高瀬の平塚の歴史に対する探究心は当然ながら相模国全域に及んだため 研究成果の幅が広く、奥行きも深い。

結果的に“湘南の由来”説を最初に唱えた人物が高瀬慎吾であったことには必然性を感じるのである。

【参考16】湯山学（1928(S3)～）著書一覧

・湘南物語、第1部（私家版）
・湘南物語、第2部（私家版）
・湘南物語、第3部（私家版）
・湘南物語、第4部（私家版）
・湯山学中世史論集1
・湯山学中世史論集2
・湯山学中世史論集3
・湯山学中世史論集4
・湯山学中世史論集5
・藤沢の武士と城　扇谷上杉氏と大庭城
・相模国の中世史
・中世伊勢原をめぐる武士たち
・中世の鎌倉　鶴岡八幡宮の研究
・鶴岡八幡宮の中世的世界 別当・新宮・舞楽・大工
・波多野氏と波多野庄 興亡の歴史をたどる
・鎌倉北条氏と鎌倉山の内 得宗領相模国山内庄の様相
・相模国の中世史
・中世伊勢原をめぐる武士たち
・中世の鎌倉 鶴岡八幡宮の研究

【参考17】“平塚の塚”碑の由来

江戸時代に編さんされた新編相模国風土記稿の中に次の様な一節がある。

里人の言い伝えとして、桓武天皇の3代孫高見王の娘政子が東国へ向かう旅の途中この地で逝去した。政子はこの地に埋葬され墓として塚が築かれたが、その塚の上が平らになったので里人はそれを“ひらつか”と呼んできた。

これが“平塚”という地名の起こりである。（市の看板表示）

注）平塚呼称の由来には“平氏の姫の墓（塚）”から来たとする説もある。

【参考18】“丁髷（ちょんまげ）塚”碑の由来

江戸時代、相模国国府祭（こうのまち）からの帰途、一之宮寒川神社の神輿をかつぐ若者と平塚八幡宮の神輿をかつぐ馬入村の若者が喧嘩、馬入村の若者が一之宮の神輿を馬入川に投げ入れる事件が発生した。

馬入村の若者16人は打首の判決を受けるが、処刑の日、罪を憎んで人を憎まぬ代官江川は丁髷だけを切り落とし打首に代え、村民から感謝された。

その民話に因み、市観光協会は丁髷を埋めたとされる塚の場所に“丁髷塚”碑を建立した。1957(S32)

【参考18】戸川貞雄（1894（M27）－1974（S49））

立候補に際し 捕物作家クラブの
ユニホームを着る戸川

純文学や通俗的小説を経て戦後は捕り物中心に転向。東京作家クラブ初代会長。

平塚市の第7･8代目市長。実績として戦災からの復興、財源健全化、近隣自治体合併、文化財保護、七夕祭り市営化、歴史検証に基づく文化財保護、湘南台命名など実施。

実弟/岩崎純孝（イタリア文学者）、長男/戸川猪佐武（政治評論家）、次男/菊村到（作家）等を輩出した文士一家である。

戸川は、杏雲堂病院内に高山樗牛の建碑をしたが、1974年の七夕祭りの初日、同病院で死去する。享年79歳。

【参考19】 村井弦斎（1864～1927（S2））－その1

10万部のベストセラー“食道楽”
の中で“食育”が強調される

三河吉田藩（愛知）の儒者清は明治維新後家族と共に江戸に移り、息子寛（ゆたか）に一家の将来を託す。寛は12歳で東京外国語学校に入学するが、猛勉強がたたり神経性疾患で療養する。

21歳の時、1年間のアメリカ遊学から帰国後報知新聞に入社。
記事のかたわら小説を執筆するが 600以上の料理や食材が登場する“食道楽”がベストセラーとなり 10万部を販売する。

“食道楽”の印税で平塚駅南側に16,000坪の土地を購入、野菜/果樹/草花/温室/家畜小屋をつくり“食道楽”の理念を追求する。

【参考20】 村井弦斎-その2

“小児には徳育よりも、智育よりも、躰育よりも、食育が先。躰育、徳育の根源も食育にある“と主張。

晩年は玄米食の研究に没頭、断食、自然食、竪穴住居生活に至るまで実践、65歳で没する。

“食道楽”に登場し、弦斎から電気工業の進路を勧められた21歳の小平青年は後年の日立製先所創業社長小平浪平。

弦斎の死後、5000坪の土地分譲を受けた小平は別荘を新築、大日立の構想を練ったとされるが昭和20年の空襲で焼失する。

弦斎が潮見台に建てた対岳樓は相模湾を望み富士に対した

【参考21】高瀬慎吾が関わった碑と場所の例

1,須賀湊の碑	千石河岸.	12,平塚宿本陣蹟の碑	平塚元警察署跡地
2,相州須賀湊札の辻蹟	札場町須賀派出所前.	13,白鷺塚の碑	追分平塚共済病院
3,河井醉茗の文学碑	夕陽ケ丘須賀公園	14,北原白秋詩碑	追分平塚共済病院
4,高山樗牛ホープの碑	高浜台.	15,田中真洲筆墨塚	四之宮前鳥神
5,村井弦斎文学碑	八重咲町.	16,川戸飛鴻の句碑	四之宮前鳥神社
6,馬入川遭難者供養碑	馬入本町真福寺.	17,怨親を超えた人々の 碑	真土
7,丁髷(ちょんまげ)塚	榎木町蓮光寺 .	18, 田村一里塚の碑	田村鹿見堂橋横
8,平塚駅柳の碑	宝町バスロータリー東側.	19,三浦義村ノ館蹟碑	田村
9,横綱武蔵山の手形石	浅間町八幡宮.	20, 曽我十郎硯水の碑	万田湘南平
10,平塚の里歌碑	見附町市民センター.	21,岡野金次郎を偲ぶ碑	万田湘南平
11,和田一竿句碑	立野町光円寺		

参考22】

発行日	発行日	執筆者	掲載文献/雑誌/他	発行所
1955	昭和30	野田宇太郎	湘南伊豆文学散歩	英宝社
1967	昭和42	富岡畦草	湘南の散歩みち	山溪出版
1968	昭和43	高瀬慎吾	湘南の文学めぐり	富士出版印刷
1977	昭和52	草柳大蔵	湘南の50年	ばら出版
1980	昭和55	藤沢文庫刊行会	目でみる藤沢の歴史	名著出版
1987	昭和62	湯山学	湘南物語1	自家本
1987	昭和62	三觜貴義	湘南の逆襲	神奈川新聞社
1987	昭和62	日本地名研究所	藤沢の地名	藤沢市
1987	昭和62	石井昭	ふるさと横須賀(下)	神奈川新聞社
1992	平成04	湘南短期大学	湘南文學第3号	かまくら春秋社
1992	平成04	情報誌	さらい(特集 湘南今昔物語)	小学館
1994	平成06	湘南短期大学	季刊湘南文學〔湘南風土記稿 相模川〕	かまくら春秋社
1996	平成08	吉田克彦	湘南再発見	江ノ電沿線新聞社
1996	平成08	川嶋理夫	新・神奈川県の地理	神奈川県高等学校教科研究会
1997	平成09	城山町	城山町史	城山町
1999	平成11	宮南 果	わが住む里・48号	藤沢市総合市民図書館
1999	平成11	吉本 尚	京急ダイヤ100年史	電気社研究会
1999	平成11	編集委員会	京浜急行100年史	京急アドエンタープライズ
2000	平成12	島本千也	湘南別荘物語・海辺の憩い	島本千也
2000	平成12	県立金沢文庫	六浦金沢海が育んだ歴史と文化	神奈川県立金沢文庫
2005	平成17	小風秀雅	湘南の誕生	藤沢市教育委員会
2006	平成18	重田 寿	わが住む里55号	藤沢市総合市民図書館
2006	平成18	吉田克彦	湘南讃歌	江ノ電沿線新聞社
2006	平成18	本田一嘉	湘南雑記	新風舎
2009	平成21	小風秀雅	茅ケ崎市史ブックレット11、	茅ケ崎市
2010	平成22	広岡友紀	日本の私鉄京浜急行電鉄	毎日新聞社
2012	平成24	日外アソシエーツ	日本全国発祥の地事典	紀伊国屋書店
2013	平成25	日本地名の会	神奈川県民も知らない地名の謎	PHP文庫
2016	平成28	深野 彰	ういろうにみる小田原	新評論
2017	平成29	梅沢 恵	特別展 愛された金沢八景	神奈川県立金沢文庫
2017	平成29	都道府県研究会	地図で楽しむすごい神奈川	洋泉社

【引用文献・資料】

127:図:平塚ゆかりの先人たち 平塚人物史研究会 2013(H25)
128:図/文:湘南の文学めぐり 湘南紀行文学会同人 富士出版印刷 1968(S43)
129:図/文:湘南伊豆文学散歩 野田宇太郎 英宝社 1955(S30)
130:図/文:湘南の散歩道 富岡畦草 山渓文庫 1977(S52)
131:図/文:湘南の50年/湘南を築きあげた先駆者たち、知性社編集、ばら出版、1977(S52)
132:図/文:目で見る藤沢の歴史 藤沢文庫刊行会 名著出版 1980(S55)
135:図/文:湘南物語第1部 湯山学 私家版 1987(S62)
136:文:湘南物語第1部 湯山学 私家版 1987(S62)
137:図:web情報/NTT Resonant Inc. 歴史を訪ねる旅相模海老名散策
文:湘南の文学めぐり 湘南紀行文学会同人 富士出版印刷 1968(S43)
138:図:本シリーズ第3話No.74
文:湘南の文学めぐり 湘南紀行文学会同人 富士出版印刷 1968(S43)
139:文:湘南の文学めぐり 湘南紀行文学会同人 富士出版印刷 1968(S43)
140:図:湘南遺産HP "湘南の由来とエリアを探る"その7
文:平塚ゆかりの先人たち 平塚人物史研究会 2013(H25)
141:図:www.tripadvisor.jp 2019八幡山の洋館に行く前にを元に描画
文:平塚ゆかりの先人たち 平塚人物史研究会 2013(H25)
142:文:平塚ゆかりの先人たち 平塚人物史研究会 2013(H25)
143:図:市長の椅子/作家市長奮戦記1966を基に元に描画
文:平塚ゆかりの先人たち 平塚人物史研究会 2013(H25)
144:図:わが市の写真帖平塚50年の歩み/平塚市役所を元に描画
文:市長の椅子/作家市長奮戦記 戸川貞雄 講談社 1966(S41)
145:文:市長の椅子/作家市長奮戦記 戸川貞雄 講談社 1966(S41)
146:図:わが市の写真帖平塚50年の歩み/平塚市役所を元に描画
文:平塚ゆかりの先人たち 平塚人物史研究会 2013(H25)
147:図:わが市の写真帖平塚50年の歩み/平塚市役所を元に描画
文:平塚市須賀の今昔 平塚市教育委員会 1966(S41)
148:文:平塚ゆかりの先人たち 平塚人物史研究会 2013(H25)
151:文:wikipedia:湯川学
152:文:平塚の塚緑地内にある"平塚の塚由来"の表示を要約
153:文:平塚の史跡碑五十選 平塚市教育委員会1991(H3)
154:図:市長の椅子/作家市長奮戦記 戸川貞雄1966を元に描画
文:wikipedia:戸川貞雄
155:文:時代の先駆者 村井弦斎 平塚市社会教育課
http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/common/000061957.pdf
156:図:湘南ひらつか浜岳地区の歴史 栗原健成2011 を元に描画
文:時代の先駆者 村井弦斎 平塚市社会教育課
http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/common/000061957.pdf
157:表:平塚ゆかりの先人たち 平塚人物史研究会 2013(H25)

❖第4話 完了